

## (2) 岐阜県立益田高等学校における実践

### <授業実践>

#### ①授業実践に向けての構え

中学校3年間の学習内容を確認しながら、高等学校の学習内容にうまく関連付けられるよう心がける。積極的にコミュニケーションを図る姿勢を育てる中で、特に「話すこと」に重点を置いた工夫をし、話す活動を積極的に取り入れる。また、幅広い表現力につながる単語や構文の定着を図りながら、基礎的な力をつける指導をさらに工夫する。その一環として毎時間基本文例の暗唱や単語テストなどを行い、理解力とともに表現力を高める授業を目指す。

#### ②第1回授業交流研究会

【日時】 平成16年6月15日(火) 第5限

##### 【公開授業1】(科目名:OCI)

- ・単元名 Lesson 5 Are you all right?
- ・授業学校・学級 岐阜県立益田高等学校 1年D組 (ティームティーチング)
- ・主な提案内容

本時の目標を、①間違いを恐れず英語を話す、②いろいろな病気や症状の説明の仕方を理解する、③いろいろな病気の症状に合った助言をできるようにする、の三つにおき、症状や治療法の表現を知り、ペア・ワークで患者役と医者役に分かれ、実際にそれらを使って対話活動を行った。医者役は患者役の言う症状を聞き取った上で「治療」をしなければならず、聞く力の向上も図れた。病名や対処法は知らない表現が多く、覚えて使いこなせるように発話の機会と活動時間を多く設定した。

##### 【公開授業2】(科目名:英語I)

- ・単元名 Lesson 2 Love for People、オリジナル教材
- ・授業学校・学級 岐阜県立益田高等学校 1年E組
- ・主な提案内容

話すことを活動の中心に据え、スピーチの発表を本時に設定した。テーマは身近で比較的作成しやすいものを選び、文章の正確さよりも、相手にメッセージを伝えることに重点をおいて準備を進めてきた。発表時も相手に伝えることを意識したスピーチになるよう心がけた。聞き手は、スピーチを定められた基準で評価する聞き方ができるように努めた。教科書は読みの練習を中心に行ない、ペア・ワークの中で、相手に意味を伝えることを意識した発話の練習をした。

##### 【授業研究会】

- ・落ち着いて明るく授業を受けられている。指示にも的確に対応でき、しっかりしているという印象を受け、以前より改善された。
- ・病状と治療の会話は難しく感じた。あまり身近に感じないものより「使える英語」を目指してはどうか。→ 道案内や買い物などの題材は中学(かそれ以前)でも取り扱っているもので、なるべく新しいものを取り上げた。
- ・スピーチは新鮮さを感じた。場面設定の工夫があるとさらに良い。文章作りや暗唱など準備にも発表にも生徒の頑張りがうかがえた。発音へのこだわりがもっとあるとよい。評価の項目はもっと細分化されるべき。

- ・益田高校で行なわれる授業科目の種類と内容と、それぞれの科目が目指すものなど、高校3年間の英語学習の流れなどについて説明をした。生徒の様々な出口（進路）に対応するための工夫や課題などを中学校に知ってもらうことができた。

### ③第2回授業交流研究会

【日時】 平成16年11月17日（水） 第5限

#### 【公開授業1】（科目名：OCI）

- ・単元名 オリジナル教材
- ・授業学校・学級 岐阜県立益田高等学校 1年E組（ティームティーチング）
- ・主な提案内容

レストランでの会話、チェックの使い方、外国通貨(ポンド)の使い方に慣れることを本時の目標に置き、4人のグループで3名の客（家族）と1名のウェイター（ウェイトレス）に分かれてグループを構成し、レストランでの注文から支払いまでの一連の流れを練習した。チェックになじみがないことやダイアログが比較的長いこともあり、難しさを感じる生徒もいたが、注文票やウェイターの帽子などの小道具が活用でき、うまく作り上げられた場面設定の中で活発な活動ができた。

#### 【公開授業2】（科目名：英語I）

- ・単元名 Lesson 13 不定詞（1）
- ・授業学校・学級 岐阜県立益田高等学校 1年B組（20名）
- ・主な提案内容

不定詞の理解と不定詞を使った作文を主に行なった。静かな雰囲気のあるクラスだが、質問には大きな声で答え、意欲的な生徒が多い。説明が多く受身になりがちな文法中心の授業の中で、作文の発表やペアでの練習など、発話機会を多めに取り入れた。不定詞の三つの用法の使い方をプリント教材で数多く練習できた。

#### 【公開授業3】（科目名：英語I）

- ・単元名 Lesson 13 不定詞（1）
- ・授業学校・学級 岐阜県立益田高等学校 1年B組（20名）
- ・主な提案内容

英語の正しい理解のためには土台として文法の学習は大切だが、無味乾燥にならないよう工夫した。不定詞の三つの用法の理解が本時のテーマだが、同じ題材でもいろいろな工夫ができることを提示した。用法に注意しながら、自分のことに置きかえた英文を作ったり、対話形式での練習を行ったりした。

#### 【授業研究会】

- ・前の年（中学校3年のころ）よりも落ち着いた生徒の姿を見ることができて嬉しかった。
- ・レストランの会話は、注文や支払いなど、すべきことが多すぎて何をやっていいのかわからない生徒や、全部の単語が読めない生徒もいた。素材をうまく（限定して）使えばもっとよくなる。声の小さい生徒もおり、徹底した指導も必要。店員が注文を聞き取れなかったらどう言うか、相手の目を見て話すこと、オーダーには順序があることなど、細かな指導も必要。→ 全体の流れを大切にしたい。できないところは個別にアドバイスする機会を増やしたい。
- ・文法事項の説明は、説明のための説明になっている。中学ではある程度の意味がわかればよしとして

いるところもある。 → 正確な文を書けるというのは話すための前提でもある。

- ・もっと生徒を誉めると意欲的にできるのでは。
- ・中学では生徒の発表に対して周りが反応するが、高校では生徒の発表に対する反応がないのはもの足りなさを感じる。 → 年齢に合った発達の一過程と考えている。
- ・四技能を総合的に取り入れた活動として、OCIの最後の単元にコマーシャル作りを行なっている。  
(作品の一部をビデオで視聴)
- ・スピーキングの力は、OCIだけでなく英語Iやライティングなどの他の科目で培ったことが生かされていることも忘れてはならない。

### <グローバル・スタンダードによる英語力分析調査>

○日時 平成16年11月4日(木) 1・2限、3・4限

○受験者 1年生 39名、2年生 41名

○結果分析

分野別の平均は、高い方から順に、Listening Comprehension, Reading Comprehension, Structure & Written Expression となっており、昨年と比べると Reading Comprehension と Structure & Written Expression が入れ替わった。Structure & Written Expression の力が下がり、今後の課題となった。学力層の幅は広く、500点満点中497点の成績者もいた。

### <イメージン・プログラム>

○近隣の英会話学校の講師を招き、活発な授業展開ができた。



○本校に来た留学生を囲む機会を設け、交流をはかった。

○英語学習教材

リスニング用CD・・・センター試験のリスニング導入にも対応した幅広い教材を選定

TOEFL問題集・・・TOEFL-IPTの受験を機に英検以外の資格にも興味を持った生徒への貸し出しや練習用に活用

英語検定用問題集・・・本校でも毎回多数が受ける英検に備え、問題集の貸し出しや面接練習用に活用

### <成果と課題>

○成果

- ・中学と高校との違いの中で、連携できるものとは何かがある程度は確認できた。「伝えたいこと(メッセージや情報)を相手に伝える力」の養成は、中学校から高校に引き継いでいけるものであるし、「たくさん話せるようになる」のもその一つである。共有できているものは特に意識して授業に生かしていきたい。

- ・2年目になり、中学校・高校お互いの授業の実態をより詳しく知ることができた。中学校で行なう活動を知ることにより、高校での活動に採り入れ易いものとそうでないものが理解でき、参考になった。例えば、中学校での授業形態は生徒の活動が中心であり、ペアやグループ活動が大きな役割を果たしている。本校でもペア・ワーク活動は大変スムーズに行なわれており、互いに教えあったり評価しあったりするなど、積極的な取り組みが感じられる。生徒がこの活動に慣れているのは中学校で学んだ方法が活かされているからだと理解できた。中学校の授業形態のすべてを高校で引き継ぐことはできないが、確実に活かしていくことができるものもあることが確認できた。
- ・他にもリスニング活動は得意なので、ひき続きこの力を伸ばしていきたい。反対に、慣れていないのは書く活動で、簡単な単語でも正確に綴る力は弱く、定着に時間がかかるようになってきた。
- ・中学校の授業の影響を受け、生徒中心の活動は格段に増えた。作った英文の発表やペアによる表現の練習など、これまで以上に発話の機会を増やした、

#### ○課題

- ・評価の機会と方法をより深く研究する必要がある。評価規準の明確化も大切である。
- ・中学校までに学んだ内容を、より明確に把握する。
- ・限られた授業時数の中で、生徒が効果的に習得できる力とは何かを考えていくと、結局は学習者本人の「意欲」ということにつきる。よい指導法とは、学習者のやる気を引き出すことと、よい学習法を見出す手助けのことだと言い換えられるのかもしれない。「意欲」が高まれば、継続的な学習習慣や基礎的な力の定着につながる。ひいてはそれが進路目標の達成にもつながっていく。今回の研究の成果を参考にして、「意欲」を引き出す活動の「しかけ」を引き続き研究していきたい。評価についても、学習者の「意欲」を引き出す一環となるような方法をより深く研究する必要がある。